



Title	Spoiler of Reformer? The Uniting for Consensus group and UN Security Council reform
Author(s)	Magalhaes Barreto Silva, Marina
Citation	大阪大学, 2014, 博士論文
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/34548
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

論文内容の要旨

氏名 (Marina Magalhaes Barreto Leite Silva)	
論文題名	<p style="text-align: center;">Spoiler or Reformer? The Uniting for Consensus group and UN Security Council reform.</p> <p style="text-align: center;">(妨害者か、それとも改革者か? コンセンサス連合と国連安保理改革)</p>
論文内容の要旨	
<p>During the years of official debates on the reform of the UN Security Council, amidst the clashes of different positions on how to transform the organ, one group was frequently on the receiving end of accusations that it was attempting to hamper the debates, delay agreement, and prevent its members' regional rivals from acquiring permanent positions inside the organ – the Uniting for Consensus (UfC) group.</p> <p>Using chronological and structural analysis, together with a support measuring system, this research aimed to analyze if the UfC group has real intentions of reforming the Security Council or if they are just a coalition of “angry neighbors”, trying to take the debates to an eternal loop of ineffectiveness. Using the results collected from several angles of analysis, this study concludes that it is possible to declare this group’s claims reasonable and its intentions of reforming the Security Council real. The structure of the formal proposal was proven a model that will actually establish a transformation of the current Council into an organ that is more democratic and with the fairest representation when compared to the other proposals on the table. Furthermore, the numbers that serve as indicators of support for a particular proposal proved that at no time during the debates was an agreement close to being achieved. This demonstrates that there was never a real momentum for the reform of the Council, or an identifiable attempt to block what could be perceived as a momentum towards an agreement.</p>	

論文審査の結果の要旨及び担当者

氏　名　(Magalhaes Barreto Silva Marina)		
氏　名	(職)	氏　名
論文審査担当者	主　查　　准教授 副　查　　教授 副　查　　教授	Hawkins, Virgil 星野俊也 竹内俊隆

論文審査の結果の要旨

この論文は国際連合安全保障理事会改革を「コンセンサスのための結集」（Uniting for Consensus : UfC）グループの言動とまわりからの評価を検討した研究である。安保理の議席拡大を検討する作業部会が国連総会で設置され20年間が経過している現在、どのように改革を進めるべきかについて意見の相違が依然として激しく、議論がこう着状態のままである。その中、新常任理事国を含まない拡大にこだわるUfCグループは、国連加盟国の多数が望む改革形態に抵抗する存在であり、実現に向けて勢いがついた改革プロセスを妨害しようとしていると、多方面から非難の対象となっている。UfCグループが実際の改革を目指しているreformerなのか、それとも改革運動を妨げようとしているspoilerなのかを検証することがこの論文の目的である。

第1章では、安保理の歴史的背景と改革運動をたどる。安保理における代表性の向上を求める動きを中心に、議論が活発になった1990年代以降の経緯を探る。第2章では、主要な改革グループとなっているアフリカ連合（6つの常任理事国議席を増加すべきだと出張）、G4（常任理事国入りを目指す日本、ドイツ、インド、ブラジル）、UfC（非常任理事国の増加のみをすべきだと主張）の構成、経緯、提案を詳しく紹介した上、UfCに対する非難を分析する。常任理事国入りを目指す国やその他の代表部による発言の他に、研究者の見解や報道を取り上げ、UfCが多方面から非難を受けている、また、他の改革グループに比べて軽視されていることを確認した。

第3章では、UfCの改革案を様々な観点から正統性の検証を試みる。UfCの改革案が他のグループへの対抗案なのかを見るため、時系列で改革プロセスをたどる。続いて、総会での討議において、それぞれのグループがどのように改革案を正当化してきたのか、「代表性」や「民主性」を中心に、討議における発言を分析する。さらに、改革された状態での安保理のもとで、理事国の投票力などのパワー配分について行われてきたシミュレーションを用いて、安保理の代表性をもっとも高める案を提示する。

第4章では、1993年以降、総会で行われてきた安保理改革に関する討議におけるすべての公式発言の内容を分析し、各国の代表がどの改革案、または改革案の要素に支持表明をしてきたのかを細かく分析している。支持率を数字化し、時系列で示すことにより、それぞれの案に対する支持の低さを明らかにし、どの改革案も採択に必要な支持率を大きく下回っているため、妨害するほどの勢いが存在する時期はなかったことを解明した。

論文はUfCが改革プロセスを妨害しようとしておらず、実際の改革を目指していると結論している。他の改革グループと同じようにメンバーの利益を追求しているが、UfCの改革案は他の案に比べて代表性が高い。しかし、国連総会における支持表明の低さを見る限り、有力と見られてきた案はそれほど有力ではないことが明らかである。よって、多数派を妨害しようとしているグループは改革プロセスにおいて存在していないと論文の結論で主張されている。本研究では、量的および質的なデータを用いて、様々な観点から説得力の高い結論を出している。審査委員会は一致して提出された論文は博士（国際公共政策）の学位を授与するに値すると認定した。